2021年度
基督教研究会 講演

いにしえの異国の詩が「私」の祈りになるとき

2022年3月 配信

同志社大学神学部　石川　立

はじめに

- この講演では、ガダマー（H.-G. Gadamer (1900-2002)）『真理と方法』の「地平の融合」というテーゼを具体的に再追跡・再確認してみたい。

第1章　「解釈学」について

解釈学とは何か、ここで扱う「解釈学」とは何か。

◆解釈学とは何か

「解釈学」の名称はHermeneutik（ドイツ語）の定訳。

グロンダン（Jean Grondin（1955- ））による解釈学の3つの語義（グロンダン『解釈学』末松壽／佐藤正年 訳（白水社 文庫クセジュ）11-15頁）。

- 第1段階：シュライアマハー（Fr.Schleiermacher（1768-1834））までの解釈学。古典的。テクストを解釈する技法。
- 第2段階：ディルタイ（W.Dilthey（1833-1911））の解釈学の基礎づけ。自然科学的認識によって代表される「説明」（外面的認識）に対し、精神科学（今日の人文科学、社会科学）における、生あるいは人間精神の表現（テクスト化されたもの）を把握（「理解」（内面的認識））する方法論としての解釈学。
- 第3段階：ニーチェ（Fr.W.Nietzsche（1844-1900））やハイデガー（M.Heidegger（1889-1976））以降の解釈学。理解や解釈は、テクストよりはむしろ、私たちの存在や世界を実存的に理解し、解釈すること。私たちにもともとそなわっている理解・解釈の営みから出発し、それを「学」として実存論的に行うことで、それは解釈学という哲学になる。
- ガダマーやリクール（P.Ricoeur（1913-2005））においては、解釈の対象として再びテクストに力点が置かれるようになるが、解釈の向かう相手には実存的にかかわる。

第1章　「解釈学」について

◆ここで扱う「解釈学」とは何か

- この講演で扱う解釈学は、前述の解釈学の3番目の段階の解釈学。この段階では「解釈学」という日本語訳はふさわしくない。
- 新しい解釈学においては、解釈する側の世界は、解釈される側の世界に巻き込まれるという事態が生じる。解釈する側の世界も変容する。
- 新しい解釈学に関しては、〈解釈学〉、〈解釈学的な〉、〈解釈学的に〉と表記する。

第2章　地平の融合

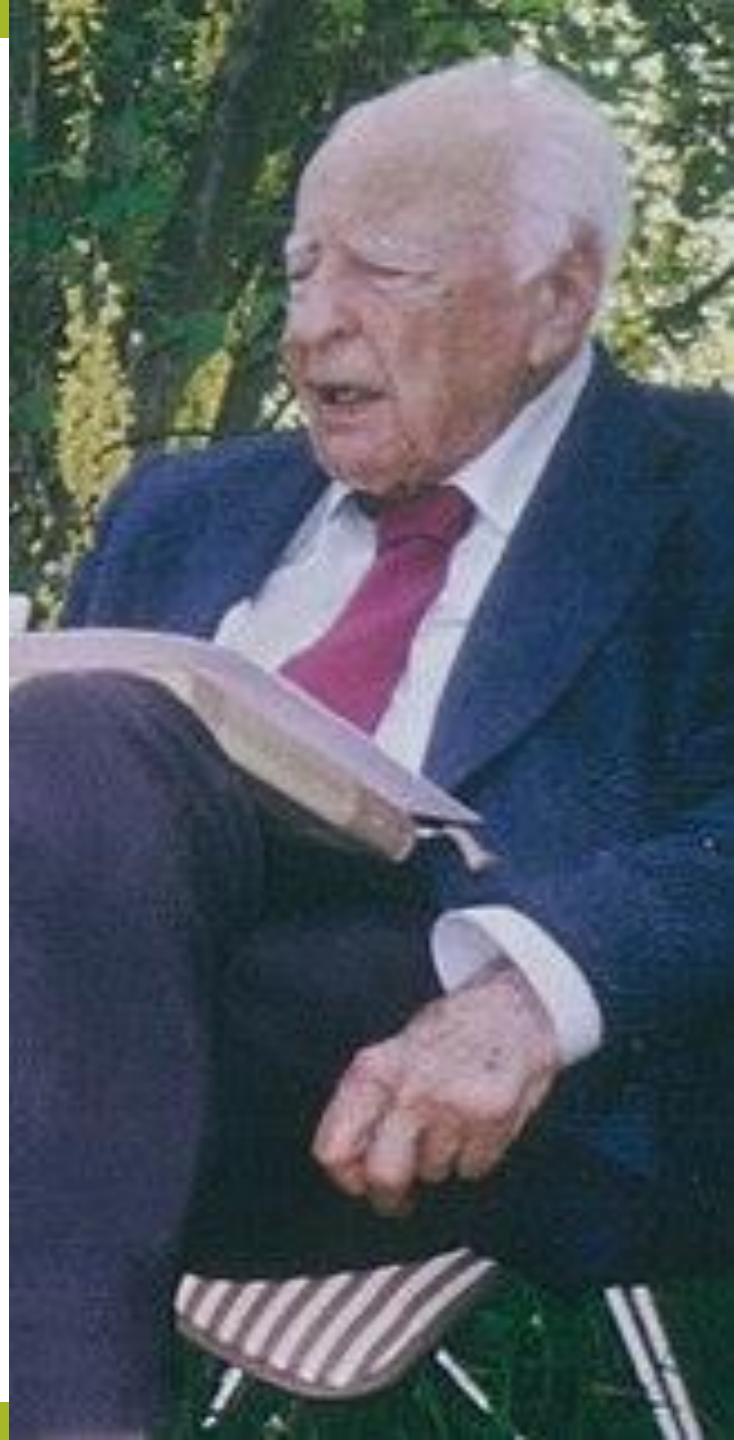
この講演では、「地平の融合」という〈解釈学的な〉事態を考えてみたい。

◆ガダマー『真理と方法』と「地平の融合」

- ハンス・ゲオルク・ガダマーは1900年生まれ。ハイデルベルク大学などで教鞭をとり、2002年に亡くなる。ハイデガーの弟子の一人。
- ガダマーは1960年に『真理と方法』（原題：Wahrheit und Methode、副題：「哲学的解釈学の要綱」）を著す。事実としての生の解釈。とりわけ過去のテクストや芸術を解釈する営みに重点を置く。テクストや芸術を自分の世界に受容することを強調。
- この書の中で、「地平の融合」（原語：Horizontverschmelzung）が述べられている（Wahrheit und Methode, Mohr Siebeck, Tübingen, 7.Aufl.2010,S.310. 邦語訳『真理と方法』第2巻（轡田収／巻田悦郎 訳）、法政大学出版局、2008年、479頁）。
- 地平の融合：我々は「先入見」に規定されながら生きている。しかし、過去のテクストや芸術と〈解釈学的な〉出会いをすることによって、その「先入見」を乗り越え、新たな地平を切り開いていくことができる。〈解釈学的な〉「理解」を通して、歴史上の「客観」側の地平と現在の「主観」側の地平の差異を超えたところで、歴史に規定されつつ歴史を新たに作り上げていくことができる。こうした「理解」のダイナミズムにおいて、「地平の融合」は引き起こされる（丸山高司『ガダマー　地平の融合』（講談社、1997年）1-2頁、116-160頁参照）

ガダマー

- Hans-Georg Gadamer
- (1900-2002)
- ドイツの哲学者。
- 哲学的解釈学と呼ばれる、言語テクストの歴史性に立脚した独自の哲学的アプローチで知られる。（地平の融合）



第2章　地平の融合

◆繰り返し音読することの効果　（１）

- 「地平の融合」に類似した〈解釈学的な〉事態を引き起こす「読み方」がある。

ハイデガーの『技術とは何だろうか』（森一郎 編訳、講談社学術文庫、2019年）の「編訳者あとがき」。

「本訳書は、薄いからといって、すぐ読み切れるとは、どうか思わないでいただきたい。･･･（中略）･･･立ち止まって考えるには、時間が要る。どんなに易しく訳しても、問題の難しさを変えることはできない。時間をかけて――できれば声に出して――読み、繰り返し読み、ピンとくるまで反芻すること、そして、それに値する古典を読破する快楽を心ゆくまで愉しむこと――これを、訳者としては読者一人一人に願ってやまない。」（161頁）

- 概念の正確さや論理性が要求される哲学書でさえも、繰り返し音読することが推奨されている。「繰り返し、声を出して読む、反芻する」という勧めは〈解釈学的に〉きわめて重要な手法。「快楽」への言及も〈解釈学的に〉注目しておくべき点。「繰り返し読む」ことによって〈解釈学的に〉は何かが変わる。

第2章　地平の融合

◆繰り返し音読することの効果　（２）

- 2019年11月22日付けの朝日新聞の天声人語：栃木県壬生町の小学校で、論語が暗唱されている、これは町おこしの一つ、という記事。「君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」･･･「そらんじようとする小学生の顔は真剣そのもの。声に出して懸命に覚えた孔子の言葉がいつか血となり肉となり、人生の糧となるだろう」と結ばれる。
- 言葉が血となる、肉となる、つまり身体化する、人生の糧になる、糧となって、やはり、身体化する――日本では昔からおなじみの事態。

第３章　テクストと受け手側両者の出会いの実際

シモーヌ・ヴェイユ（1909-1943）の言葉（『神を待ちのぞむ』「別れの手紙 4 霊的自叙伝」）を考察していく。

「わたくしはそれをただ美しい詩として諳誦しているつもりでしたが、知らず知らずに、この諳誦は祈りのような力を持っていました。」（渡辺秀訳）

◆このテクストを選ぶ理由

- 個人的な理由。

シモーヌ・ヴェイユ

Simone Weil (1909-1943)

- ユダヤ系フランス人。哲学者。
- 哲学教師になる。
- 1934年冬～35年夏、工場体験。
- 農業にも従事。ドミニコ会司祭ペラン神父に紹介され、南仏の農家ギュスターヴ・ティボンの農場で数週間、研修。
- ロンドンで客死。
- 死の４年後、農民哲学者ギュスターヴ・ティボンが、シモーヌから託されたカイエを編集し、『重力と恩寵』を出版。ベストセラーになる。

第３章　テクストと受け手側両者の出会いの実際

◆このテクストの文脈と背景

- シモーヌ・ヴェイユがマルセイユで知り合ったドミニコ会修道院長ペラン神父が彼女の手紙や論文やエッセイをまとめ、『神を待ちのぞむ』を出版。

- 当該の言葉が書かれている手紙の中の文脈：ある修道院で、若いイギリス人のカトリック信者に教えてもらった17世紀のイギリスの「形而上的な」詩人たち。その中のジョージ・ハーバートの詩「愛」を諳誦した。この詩の諳誦によって、彼女は大きな啓示をうけた。

◆このテクストの意味

- 「この諳誦は祈りのような力を持っていました」→「この諳誦は祈りになっていました」

第３章　テクストと受け手側両者の出会いの実際

◆ここで「美しい詩」と言われている詩

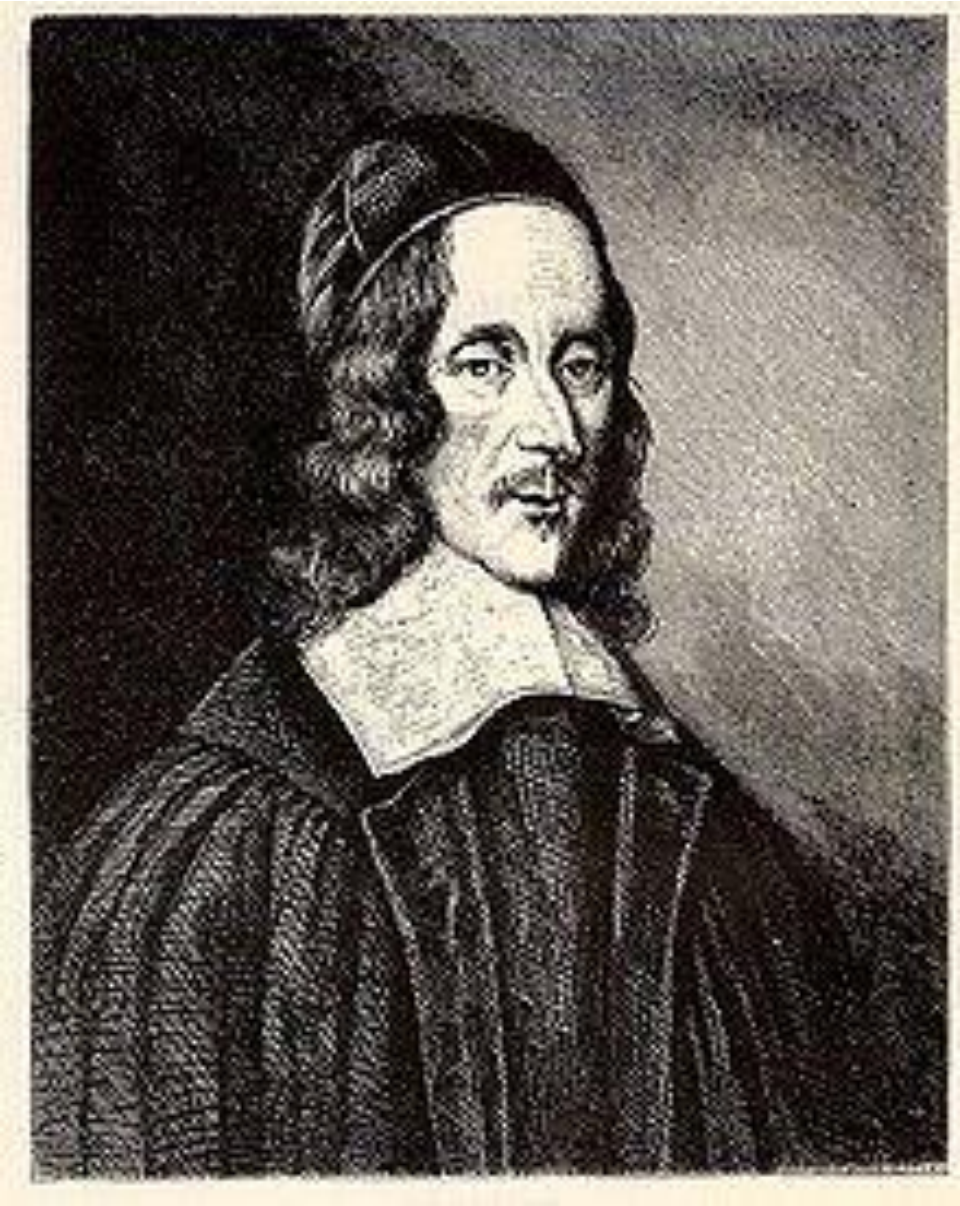
- 「美しい詩」と言われている詩：イングランドの詩人ジョージ・ハーバート（George Herbert（1593-1632））の”Love”。
- 原文と邦語訳（平井正穂編『イギリス名詩選』岩波文庫より）。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

- この詩について2点指摘

１．キリスト教的である。聖書的である。「雅歌」と似た問答形式を採る。主の贖罪や主の晩餐などの言及。

２．隠喩に満ちた「形而上学的な」詩。



George Herbert

(1593-1633)

- 17世紀のイングランドの詩人。形而上学的詩人の一人。キリスト教信仰をテーマにした作品を多く発表。

LOVE

Love bade me welcome. Yet my soul drew back,
Guilty of dust and sin.

But quick-eyed Love, observing me grow slack
From my first entrance in,

Drew nearer to me, sweetly questioning
If I lacked any thing.

A guest, I answered, worthy to be here:
Love said, You shall be he.

I the unkind, ungrateful? Ah my dear,
I cannot look on thee.
Love took my hand, and smiling did reply,
Who made the eyes but I ?

Truth Lord, but I have marred them: let my shame

Go where it doth deserve.

And know you not, says Love, who bore the blame?

My dear, then I will serve.

You must sit down, says Love, and taste my meat:

So I did sit and eat.

愛

愛なる主は、よく来たとばかり、私を迎え入れ給うたが、
　　塵と罪に塗れていた私の魂はあとじさりした。
だが、こんな風に戸口から一歩入った瞬間忽ち怯んだ私を、
　　主は目ざとく見つけ、さっと近づき、
声をかけ、どうした、何か忘れものでもしたのか、と
　　優しく訊ねられた。

「私には主の客人になる資格がないのです」と私は答えた。
　　「お前こそわたしの客人なのだが」と主は言われた。
「この不実で恩知らずの私が、でしょうか？　おお、主よ、
　　私にはお顔を見る資格はないのです」
主は私の手をとり、にこやかに言われた、「お前のその眼を
　　誰が、わたし以外の誰が、造ったというのだ」と。

「勿論、主が造られました。ですが私は汚してしまったのです。」
　　ですから、受けるべき恥を私に負わせて下さい」
「その恥目を誰が負ったのか、知らないのか」と主は言われた。
　　「おお！　私は今こそ主にお仕えします」
「席につき、わたしの出す肉を食べるがよい」と主は言われた。
　　私は席につき、その肉を食べた。

第３章　テクストと受け手側両者の出会いの実際

◆このテクストを考察する2つの観点

・シモーヌ・ヴェイユの言葉の＜解釈学的な＞考察のための2つの観点。

１．テクストのジャンル。〈解釈学的な〉営みによって、ジャンルが変わる。

２．近さ。「近さ」は〈解釈学〉にとって重要な感覚であり、「理解」にもかかわる。

◆言葉の考察

・シモーヌ・ヴェイユの言葉を4区分し、〈解釈学的に〉考察していく。

わたくしはそれをただ美しい詩として／
諳誦しているつもりでしたが／
知らず知らずに／
この諳誦は祈りのような力（直訳：祈りの力）を持っていました
→この諳誦は祈りになっていました

第３章　テクストと受け手側両者の出会いの実際

「わたくしはそれをただ美しい詩として」

- シモーヌ・ヴェイユは、対象のテクストのジャンルを「美しい詩」と枠づけしていた。この詩に対し、当初、距離感や警戒心をもっていた。いい詩だと惹かれたが、それに巻き込まれてはおらず、「客観的に」突き放していた。

「諳誦しているつもりでしたが」

- シモーヌ・ヴェイユは詩に巻き込まれつつある。それを引き起こしたのが「諳誦」。身体を使うことで、言葉が身体化し、「私の詩」という感覚になってくる。当初、対象の詩をジャンル分けし、「距離」をとっていたが、ジャンルが緩み、距離感もなくなってくる。

第３章　テクストと受け手側両者の出会いの実際

「知らず知らずに」

- 当初は、その詩を意図的にジャンル分けし、客観化し、距離をとっていたが、人の計らいを超えた力がいつの間にか入ってきて、気が付かないうちにその詩が自分の近くにきた。

「この諳誦は祈りのような力を持っていました（⇒祈りになっていました）」

- シモーヌ・ヴェイユがハーバートの詩に枠付けしたジャンルは壊れ、「私」の詩になる。さらに、それがより「私」の詩になってきて、「私」さえも通り越し、気が付けば、「私」の中にいる言葉そのもの・キリストがその詩によって祈っている――そういう事態が起こった。

おわりに

- キリスト教の文脈の中では、キリストという言（ことば）が「私」の身体となり、そのキリストという名の内的な言（ことば）の力が「私」を通して祈る、という事態が生じたのではないか。

- 「生きているのは、もはや私ではありません。キリストが私の内に生きておられるのです」（ガラテヤ書2章20節）。

- 以上のような〈解釈学的な〉レベルが、シモーヌ・ヴェイユにとっての「理解」であり、彼女にとっての「地平の融合」であったと考えられる。

（聖書の解釈に関して付言：以上の考察の乏しい灯りが、聖書を〈解釈〉する途を照らしだす役目を微力ながら果たさないものかと期待する）

2021年度
基督教研究会 講演

いにしえの異国の詩が「私」の祈りになるとき

終了